



大阪大学美学研究室

キーワードを定めて解説する

## キーワードを定める

研究キーワードは、自分の問題関心を一言であらわした語です。たとえば、装飾・色彩・空間・表現・民藝・茶庭・身体といった語が、研究キーワードになりえます。ベンヤミンといった人物名や、サヴォワ邸といった作品名は、研究キーワードになりません。固有名は、問題関心そのものというよりも、問題関心を明らかにするための通り道とみるべきです。

研究キーワードについて検討する作業は、自分の研究に一本筋を通すために必要です。これが出来ていないと、何が言いたいのか分からない論文、一貫性に欠く論文になりがちです。研究キーワードは、自分の問題関心をひとに伝えるうえで大いに役立ちます。私たちは短い時間のなかで自分の問題関心をひとに伝えないといけない状況に置かれるので、一言で察してもらおうのも大事です。

学び始めのうちは、問題関心はかなり漠然としているのが普通で、問題関心をうまくあらわす語がなかなか浮びません。そうした場合は、教員とよく相談したうえで、研究キーワードと一緒に考えましょう。研究の深まりとともに研究対象への理解も深まりますから、研究キーワードを自分で考え直すとよいでしょう。

## 問いを立てる

研究キーワードが問題関心をあらわす語ならば、研究キーワードには問いがともないます。一番の問いは、キーワードがあらわす事柄が一体何であるのかという問いです。たとえば、虚構とは何か、装飾とは何か、キーワードが前衛書であるならば、書とはそもそも何なのかという具合になるでしょう。問いの基本形を、以下にあげています。簡潔な問いを3つくらい立ててみましょう。他の人の意見を参考にして、上手い問いかたを考えましょう。良い問いは、良い答えをまねきます。研究を進めるなかで、問いを更新してゆきましょう。

本質をめぐる問い	虚構とは <u>何なのか</u> 食のデザインは <u>どんな仕事か</u>
意義をめぐる問い	手仕事は <u>なぜ必要なのか</u> 手仕事は <u>そもそも必要な</u>
由来をめぐる問い	料紙装飾は <u>いつに始まったのか</u>
展望をめぐる問い	民藝は <u>どうなるのか</u> 衣服は <u>どうあるべきか</u>

## 題目を表明する

研究テーマはかならず研究題目すなわちタイトルとして表します。例えば「イサムノグチの空間造形について—現象学からの考察」とする場合には、「空間造形」が研究キーワードすなわち自分の問題関心をあらわす部分です。一見すると「イサムノグチ」が論文の主眼になっているようにも見えますが、この部分はむしろ自分の問題関心を深めるための具体例とみるべきです。副題の「現象学からの考察」は、自分の問題関心にたいする方法論です。副題はもう一つの切り口であるので本題で言い尽くされていれば省くこともできます。

XXX の YYY について—ZZZ の観点からの考察

XXX：自分の問題関心を深めるための具体例

YYY：研究キーワード＝自分の問題関心

ZZZ：自分の問題関心を深めるための方法論

研究題目を先に決めておくと、構想もまとまりやすく、計画も立てやすくなります。しっくりこなくなったら変えればいいだけの話です。題目はまた他の人があなたの取り組みを知るうえでも欠かせません。題目をとりあえずでも始めに決めてから研究に取りかかります。

## 研究題目の例

研究分野	研究キーワード	研究題目
美学	創造	集団創造をめぐる議論
美学	虚構	フィクションとは何か
美学	人工知能	人工知能による芸術創作
美学	深層学習	人工知能は美を学べるか
美学	クオリア	機械は色を感じているのか
美学	日常美学	日常生活における美的経験
美学	音の触感	ASMR の聴体験における触感
美学	食感	食感の多様さと分類
美学	自然美	人新世における自然美の定義
美学	生命倫理	バイオアートと生命倫理

## 研究題目の例

研究分野	研究キーワード	研究題目
映像	雰囲気	風景写真の雰囲気
映像	ディストピア	未来映画とディストピア
映像	仮想身体	映像メディアと仮想身体
映像	仮想空間	映像メディアと仮想空間
工芸（民藝）	工芸の美	柳宗悦における美の説明
工芸（陶芸）	手仕事	現代陶芸と手仕事の意味
工芸（漆芸）	蒔絵	現代テクノロジーと蒔絵
工芸（染織）	緋 かすり	沖縄における緋の伝統とその継承
デザイン	装飾	工業製品における装飾の機能
デザイン	装飾史	装飾史の方法をめぐる考察
デザイン	簡素さ	日本文化とミニマリズムの理解
デザイン	評価	グッドデザイン賞の歴史
デザイン	公園	19世紀西欧における都市公園の建設
デザイン	田園都市	ハワードと田園都市の思想
デザイン	産業遺産	産業遺産を利用した景観デザイン
デザイン	地域主義	建築における地域主義の系譜
デザイン	土着性	現代建築にみる新しい土着性
デザイン	労働	モリスの社会主義思想における労働観
デザイン	参加	社会デザインにおける参加の意味
デザイン	未来	思弁デザインにおける未来の理解
デザイン	食の未来	3Dフードプリンターの可能性
デザイン	批評	ファッション批評の歴史
デザイン	書体	黎明期かな書体の復刻

## 作業の進めかた

### A 計画

- ① 研究分野 ② 研究キーワード ③ 研究題目

↓ ↑

### C 執筆

- ① キーワード解説  
② 卒論の概要  
③ 卒論

←

→

### B 作業

- ① 作品を観察する ② 現場を調査する  
③ 資料を収集する ④ 文献を読解する  
⑤ 用語を吟味する ⑥ 意見を交換する

A 計画と B 作業とを往復しながら

C 成果をまとめる 循環が大事です

## キーワード解説

美学は、18世紀に感性論として成立し、19世紀には芸術の哲学として発展を遂げました。これまで美学は、感性・美・芸術について論じてきたようで、感性・美・芸術について論じるための用語について論じているという向きがありました。美学の仕事のうち大事なものは、アートを論じるうえで使用される用語について反省することです。キーワード解説をとおして、研究対象を根本から問い直そうとする仕事こそ、あなたの美学なのです。

卒論作成にむけた準備作業として、研究キーワードについての解説文を、用語集の1項目として執筆します。既存の辞典の丸写しではなく、複数の文献にあたって、独自の記述を追求します。一般論にとどまらず、自分の研究関心を注ぎ込みましょう。これにより、辞事典を使いこなせるようになるとともに、研究キーワードの意味をよく理解したうえで、問題について適切に論じることができるようになります。用語集として成果を蓄積するならば、他のひとの役にも立ちます。

キーワード解説は、自分の問題関心を一言であらわした語について解説するもので、導入部と5つ程度の部分説明からなります。これに対応して5つ程度の小見出しを立てます。執筆にあたっては、一番詳しい辞書を引いておきましょう。英語辞典ならば Oxford English Dictionary です。また、専門分野の事典にあたきましょう。美学関係ならば、美学事典類、哲学事典類、カント事典など、可能なかぎり多くの説明にあたって、精度をあげていきます。

### キーワード解説 導入部

- ① 数ある定義をふまえて適切と思われる定義をみずから設定  
② 必要に応じて、対応する欧米語の意味に触れる  
    微妙な差異に注意 装飾 decoration / ornament 構成 composition/ construction  
③ 用語の歴史について触れる a. 語形の変化 b. 意味の変化  
④ 種類をあげる 舞台の種類：円形舞台・張出舞台・額縁舞台  
⑤ 構成要素＝分析の観点をあげる 書の要素：筆・紙・墨・文字・書く行為

楽譜 music score

導入部  
短い定義  
語の歴史 | 本来の意味  
種類  
構成要素 | 主要な観点

小見出し5つぐらい

前半は基本の確認

後半で自分の関心に触れる

4000文字程度

あなたのキーワード



## 楽譜 music score

楽譜とは、音楽を紙などのうえに目に見えるように記したものをいう。楽譜というとき、たいていは、一定の記譜法 notation にもとづいて記譜されているものをいう。楽譜のおもな目的は、音楽という消えゆく現象を、記録・保存・伝承することにある。楽譜は、録音技術が発明される前には、音楽を記録する唯一の手段であったことは重要である。とはいえ、楽譜はたんに、記録・保存・伝承のための手段にとどまらない。楽譜において音を細かく記録できるということは、音楽が複雑なものへと発展していく礎にもなりえた。さらに、楽譜のなかには、たんなる手段にとどまらず、それ自体の美しさをそなえたものもあった。

### 西洋音楽と楽譜

私たちが見慣れている楽譜は、西洋において発達した記譜法にもとづくもので、譜線と音符、強弱のなど記号からなる。西洋音楽がとくに芸術音楽として発展していった背景には、記譜法の発達によるところが大きい。第一に、記譜法の発達によって、音楽は作品として緻密に作り上げられるようになった。第二に、記譜法の発達によって、音楽はつねに同一の作品として固定化されるようになった。第三に、記譜法の発達によって、音楽は作品として解き明かされることを期待するものとなった。第四に、記譜の発達によって、音楽のよりどころとなる音楽理論もうながされた。さらにまた、西洋音楽は、発達した楽譜のおかげで、後世に残されるというだけでなく、異国の土地へと運んで再現できるようになった。楽譜のなかには、音楽をおこなう手段としてだけでなく、それ自体が魅力をもつものもあった。

### ネウマ譜

中世ヨーロッパの楽譜では、旋律の動きを思い起こさせるために、ネウマと呼ばれる線状の記号がもちいられた。中世キリスト教会の典礼音楽であるグレゴリオ聖歌は、9世紀以降、それぞれの地域において固有のかたちのネウマによって記譜されていた。この頃のネウマ譜はまだ、音楽の完全なる設計図という性格を

もちあわせておらず、備忘録程度のものであった。それは、旋律の動きに重点を置いたものであり、音高はいまいに表示されていた。とはいえ、譜面そのものの出来映えは美しく、キリストやそれを仰ぎみる使徒たちの細密画がそえられたり、美しい飾り文字が描かれたりした。

10世紀から11世紀になると、ネウマ譜に譜線が添えられて、音程関係が明示されるようになる。これは、ローマにおける聖歌の歌いかたを正確に広めようとする意図からきている。さらにまた、譜線が引かれることで、文字と楽譜との区別がより明確になった。

12世紀から13世紀にかけてのノートルダム楽派では、音の高さだけでなく、音の長さもある程度まで記譜されるようになった。多声音楽への発展段階において、縦方向への意識が生まれ、リズム表示を明確にする必要があったからである。そこでリズムは、いくつかの基本パターンに分類され、リズムモードとよばれる6つのリズム型によって表示されるようになった。しかし、これでもまだ不十分なため、グレゴリオ聖歌が当時どんなリズムで演奏されていたかは、今日でも学者のあいだで論議が絶えない。

13世紀以降は、四角形のネウマが一般化し、ドイツをのぞく全ヨーロッパで使用された。ドイツだけは釘のような特有のネウマを使用していた。中世の世俗歌曲もたいていネウマによって記譜された。今日でもカトリック教会では、グレゴリオ聖歌を表示するのに、四本線つき四角ネウマの楽譜をもちいるのが建前となっている。

### 五線譜

教会音楽では聖歌隊の音域が1オクターブだったため、譜線はもともと4本であった。しかし17世紀のイタリアのオペラ界において音楽の記譜法を統一しようとする動きが出てから、譜線は5本に落ち着くようになる。しかしそれも決まっていた訳でなく、音域の広い鍵盤楽器の場合には、譜線が8本におよぶこともあった。現在の記譜法が確立したのは17世紀中頃とみられる。五線譜がいま世界中で用いられているのは、音楽をかなり細かく記録できるためもある。それでも、五線譜は、音楽のすべてを表記できるわけではない。

つまり、楽譜に書くということは、音楽の微妙なところを切り捨てることだということである。

### 楽譜の印刷

印刷技術が広くゆきわたるまで、音楽は、写本によって伝承されるか、あるいは、聖職者や音楽家によって口承されるかであった。15世紀から16世紀にかけて、印刷技術がヨーロッパじゅうに広まるにつれ、文学や哲学などの書物は、数百部単位で刷られるようになったが、楽譜印刷はなかなか普及しなかった。15世紀以降もなお手書きの楽譜がつくられ、印刷物に楽譜を書き入れる余白がもうけられたりもした。

15世紀には、楽譜の木版印刷が試されてはいた。木版印刷とは、彫り込まれた一枚の版木をもちいて印刷する方法である。木版刷りの楽譜は、木彫り職人に高い技術をもとめるものであり、初期のものは、全体にぎこちない印象をあたえる。木彫りによって図表としての楽譜を美しくみせることは、装飾模様を美しくみせるよりも難しかっただろう。また、垂直線と水平線との直角の交わりを印刷するには、インクが溜まらないよう工夫しなければならない。16世紀には、木版刷りながら精巧な楽譜もあらわれた。

15世紀半ばにグーテンベルクが活版印刷をみだしたが、15世紀末までには、この技術はヨーロッパじゅうに広がった。活版印刷とは、金属活字を組んで版をつくって印刷する方法である。もっとも、楽譜の場合には、活字といっても、音符などの要素によって版面がつくられる。ペトルッチという人物は、16世紀に入って楽譜の活版印刷をかなりの水準で実現したことで知られる。続いて、パリのアテナンは一度刷りの方法を実用化した人物とされている。しかもアテナンの楽譜はとても優れた出来映えだったので、楽譜の活版印刷をおこなう同業者たちに模倣された。

18世紀から19世紀まで、楽譜印刷において、銅版印刷も広くおこなわれた。銅版印刷では、銅版に画線をじかに彫り込んで版をつくり、版の画線部にインクを含ませることで印刷をおこなう。手彫りではあるが、ポンチによって符頭などの記号を打ち込むことで、全体を均質に仕上げることができる。19世紀には、楽譜印刷において、石版印刷がもちいられるようになる。

### 図形楽譜

西洋の音楽家たちは、音楽という消えゆく現象を、楽譜にとどめようと努力してきた。そしてたしかに、西洋の芸術音楽は、記譜法の発達によって、楽譜に詳しく記録されるようになった。19世紀になって、永遠不滅の芸術としての音楽という考えが強まったが、そのことは、発展をとげた楽譜の流通によるところが大きい。しかし、20世紀になって前衛音楽がそれまでの約束を打ち破るなかで、永遠不滅の芸術としての音楽という考えも疑われてくる。とくに、音楽に不確定なところを残すことが試みられると、完全なる設計図としての従来の楽譜の在りかたも問われてくる。

前衛音楽では、図形楽譜 graphic score がしばしば用いられた。図形楽譜とは、五線譜ではない、五線記譜法から自由な、グラフィックな楽譜のことである。たしかに、五線譜もまた図形といえるが、図形楽譜とわざわざ言われるのは、五線譜でないことを強調するためである。

図形楽譜には二つの方向のものがある。一つは、特殊な音楽を記すために、五線記譜法ではない方法がとられる場合である。とくに、セリー音楽のような複雑な音楽や、電子音楽のような数量で測定される音楽において、新たな記譜法がもとめられた。もう一つは、演奏家を刺激して、未知の音楽を促すために、楽譜のようなものが使用される場合である。図形楽譜の多くがこれにあたるが、図形楽譜といいながら、五線譜の断片を含むものや、絵画のようなものもある。

作曲家の武満徹は、グラフィックデザイナーの杉浦康平と共同で、2つの図形楽譜を手がけた。《ピアニストのためのコロナ》1962は、五色の五枚の正方形の紙からなり、五枚とも中心に向けて切れ込まれている。もう一つの《弦楽のためのコロナII》1962は、三枚の透明プラスチックフィルムからなり、三枚にはコロナのような円環がそれぞれ異なる単色で刷られている。どちらの楽譜も、それ自体として美しく、シートをずらすことで演奏の指示があたえられる仕掛けとなっている。もっとも、演奏の指示といっても、解釈にゆだねられるところが大きく、自由な演奏にひらかれてもいる。

(梶本愛)